

アニュアルレポートとの統合のメリットを示す報告書

特定非営利活動法人 循環型社会研究会 代表 山口民雄

ステークホルダーの関心、懸念、期待への対応に前進

曙ブレーキ工業の第三者意見を担当させていただいて今回で5年目となりました。これまで、毎回の指摘を真摯に受け止められると共に、最近では制作過程でダイアログを開催し、指摘事項を積極的に報告書へ反映されていることに敬意を表します。

本レポートはこれまでの「環境・社会報告書」からアニュアルレポートと統合し、包括的に企業活動をレポートした「AKEBONO REPORT(事業・CSR活動報告)」に変わりました。アニュアルレポートとの統合は、大きな流れになる可能性があります。それは、投資家がESG(環境、社会、ガバナンス)に対して敏感になり、これらに関する情報へのニーズが高まっていること、他のステークホルダーが経済的な激動期に企業をより正しく理解するためにCSR報告書に業績報告や財務情報を求めるためと考えます。わが国の報告書でも統合の先例はありますが、その多くが従来のアニュアルレポートの基調に包み込まれています。そのため、ステークホルダーのニーズを把握し、誌面へ反映することが後退し、顔の見えないレポートになっている例が少なくありませんでした。本レポートはこうした先例の轍を踏まず、両報告書の機能の相乗効果で機関投資家をはじめ、多くのステークホルダーが満足する内容に近づいており、統合の成功事例と評価することができます。

CSR活動報告の視点からも大きく前進し、ステークホルダーの関心、懸念、期待に応えた点が少なくありません。その代表例は「雇用に関する情報」です。2008年度は米国発の急激な経済環境の悪化により、わが国でも雇用調整の嵐が吹き、多くの社会問題が顕在化しました。こうした状況下では、各企業のCSRの「本気度」が問われますので、CSR報告では「雇用に関する情報」は不可欠です。本レポートでは、非正規社員の契約解除、正社員の希望退職に言及し、その規模とともにさまざまな配慮を実施したことが報告されています。こうした取り組み、報告にCSR活動の指針である「曙の理念」の具現化を読み取ることができます。

マテリアリティ・マップの作成に着手したことも高く評価できます。こうした2軸でそれぞれの課題をプロットする試みは、今後、「曙の理念」を具体的なCSR活動にブレークダウンするときに役立つことと思います。今回は「リスク評価マップ」をベースにした試行でしたが、この1年をかけてさまざまな指標、ステークホルダーの声、評価法を活用し、「2010年版マテリアリティ・マップ」を完成されることを楽しみにしています。

創業100周年の企業像を描いてください

以上のように大きく進展している一方、さらなる努力が求められる面も少なくありません。その代表例は、「バウンダリー(対象範囲)の拡大」で、過去2年間申し上げてきました。確かに、この点にも留意され米国内工場での休業災害度数やTOPICSで活動事例が記載されていますが、その情報量は極めて少ないといわざるを得ません。国内外の従業員比、売上高比から、情報の充実は不可避といえます。

特に環境データは昨年も申し上げましたが国内に限定されています。タイを含め7工場ではISO14001の認証を取得していますので、データの収集はそれほど難度を要するとは思えません。次年度の報告ではデータの開示を期待しますが、不可能な場合には進捗状況と問題点を記載してください。

「曙の理念」がさまざまな現場で根付いてきていることが、今回の特集などで感じることができました。ただし、行き着く先のイメージがいま一つ不鮮明です。次回レポートでは、日々の取り組みに「曙の理念」が生かされると、どのような企業像になるのか、具体的に描かれることを期待します。2009年は創業80周年を迎えた年であることから、100周年の企業像を描いてください。従業員の方々にも具体的な指針になると思います。

*循環型社会研究会：次世代に継承すべき自然生態系と調和した社会の在り方を地球的視点から考察し、地域における市民、事業者、行政の循環型社会形成に向けた取り組みの研究、支援、実践を行うことを目的とする市民団体。
URL:<http://www.nord-ise.com/junkan/>

第三者意見を受けて

「AKEBONO REPORT 2009」では、特定非営利活動法人 循環型社会研究会の山口代表に第三者意見をお願いし、大変有益なご指摘とNPO法人という公平な立場からの客観的な評価を頂戴しました。

今年は従来の環境・社会報告書の枠内に留まらず、アニュアルレポート(財務業績報告)を包含することにより、経済・環境・社会性の活動をこの一冊に凝集させました。元来、それぞれに持ち味の異なるアニュアルレポートと環境・社会報告書とをうまく統合させ、「AKEBONO REPORT 2009」として進化させることができましたのも山口代表のご指導の賜物と深く感謝しております。また、新たに「マテリアリティ(重要性)」「海外(米国)における災害度数率」「環境効率変化に対する考察」などを盛り込むことで、報告書としてより一層の充実を図り、弊社の環境・社会性活動などの「見える化」に取り組んでまいりました。

特にマテリアリティ・マップ(重要性相関図)という手法に着手した事に対して高い評価をいただいた事は、とても喜ばしいことです。今回、掲載したマップは、まだ準備版としての段階ではありますが、それでも課題を複眼的に可視化するマップの効能を十分実感できます。今後、幅広く充実した内容に高めたいと考えております。

一方、日本・北米・欧州およびアジアのグローバル体制を構築し事業展開している中で、海外の環境情報に関する定量的な報告は実現できませんでしたが、「次年度には海外環境データも開示するように」との山口代表のご指摘を重く受け止め、次年度掲載にむけての準備を既に開始いたしました。

今年は当社創立80周年の節目の年にあたり、80年間におよぶ歴史を、2頁を割いて振り返ったわけですが、「創業100周年(20年後)の企業像を描いてください」というご意見は建設的かつ貴重なものと認識しています。GM、クライスラーが破産法を申請するなど、一昔前では予測もされなかった事が次々と起こる現代において20年後の社会を的確に予測し、その上で会社の20年後(100周年)を輝かしいものにするストーリーを描ききすることは簡単なことではありません。

しかし、「曙の理念」を日々の取り組みに徹底的に生かすことによって、20年後の姿そして、未来へ向けての新しいakebonoの姿を提示してまいりたいと思います。

代表取締役副社長 横尾俊治